

日交研シリーズ A-827

令和2年度自主研究プロジェクト

「新しい道路交通システムの社会的受容の包括的理解に向けた学際研究」

刊行：2022年3月

新しい道路交通システムの社会的受容の包括的理解に向けた学際研究

Interdisciplinary study towards a comprehensive understanding of social acceptance of new road transport systems

主査：谷口綾子（筑波大学教授）
Ayako TANIGUCHI

要 旨

本プロジェクトは、自動運転システム Autonomous Vehicles(AVs)の社会的受容に向けた課題を、(1)交通工学・心理学・倫理学・宗教学・メディア学といった様々な学問分野の切り口から定量的／定性的に把握、(2)19世紀末に導入されたかつての新交通モード「クルマ」の社会的受容を民俗学・法歴史学の観点で辿ることで把握することにより、AVsが社会や文化にもたらすであろう影響を可視化し、AVsを社会にソフトランディングさせる一助とすることを目的としている。

第1章では、人類にとって移動がどのような意味を持つか、モビリティに関する哲学的課題について述べている。2章では、AVsの倫理の分野で比較的論じられることは少ないが重要な倫理的論点を、AVsの研究開発における学際的な取り組みをより生産的なものにすることを念頭に置きつつ論じている。3章では、AVsの社会実装に向けた社会実験に対するNIMBY(Not In My Backyard)問題を取り上げ、日本・英国・ドイツの市民の2020年時点での態度を比較分析した。4章では、AVsについての読売新聞の記事を分析し、AVsの開発目的や期待と懸念に関する論点の変遷を質的/量的に明らかにした。5章では、AVsの開発目的やそれに伴い必要となる社会変革を巡る14の「論調」を設定し、その論調に同意する程度を計測し、日本・英国・ドイツの三カ国比較を行った。6章では自動運転移動サービス事業のための制度的課題のうち、安全性評価及び資格付与の手続の在り方について、①従来の手続の枠組について概説、②自動運転移動サービスに対する現在の取扱い等について説明、③今後の課題を検討した。

これらの研究は今後も継続される予定であるが、まずは2020年度研究成果として本報告書を取りまとめた。執筆者は以下の通りである。

- 1章 久木田水生
- 2章 神崎宣次
- 3章 田中皓介
- 4章 谷口綾子・宮谷墓香純
- 5章 中尾聡史
- 6章 中川由賀

キーワード：自動運転, 社会的受容, ELSI, NIMBY

Keywords: Autonomous Vehicles, Social Acceptance, Ethical-Legal-and-Social-Issues, NIMBY